

共通テスト後の出願校決定と入学後の成績との関係

——K大学一般選抜前期日程入学者の志望順位に着目して——

竹内 正興（香川大学）

国立大学一般選抜では、共通テスト（大学入学共通テスト）後の自己採点結果に基づく事後出願方式により、共通テスト前の第1志望校を断念し、他の大学や学部等に変更して出願する受験生が多く見られる。本研究では、K大学一般選抜前期日程を経た入学者に対する2022～2024年度の3年間の調査結果から、共通テスト後に志望校を決定（変更）した者について、志望順位と入学後の成績（1年前期 GPA）との間に関連が見られるのかどうかを検討した。その結果、全体では1年前期の成績が学部等の志望順位に依存する傾向が見られた。また、男女別に見た場合、女子は学部等の志望順位に依存することなく、男子よりも入学後の成績が良好である一方で、男子は、第2志望以下の者が第1志望者よりも GPA が低い結果となった。

キーワード：国立大学一般選抜、大学入学共通テスト、志望順位、入学後の成績

1 問題の所在

本研究は、共通テスト（大学入学共通テスト）後の国立大学出願直前期（一般選抜前期日程）に受験校を決定（変更）した者について、大学・学部等の志望順位と入学後の成績（1年前期 GPA）との間に関連が見られるのかどうかをK大学入学者に対する調査結果より検討することを目的とする。

国立大学一般選抜の受験校決定時期については、半数近くが共通テスト後という調査結果が複数見られる（寺下ほか, 2008；吉村・木村, 2010；高地, 2014）。これは、共通テストの自己採点結果に基づく事後出願方式が大きく影響しており、共通テスト前に設定していた第1志望校に合格できる確率が低いと判断すれば、志望順位を下げたとしても合格できる可能性が高まる第2志望以下の大学・学部等に出願先を変更する受験生が多いことを意味している。つまり、受験校の決定にあたっては、志望順位以上に合格できる可能性が高いかが重視されているということになる。ただし、地方国立大学の事例として、第1志望校を断念して第2志望以下の大学等に出願先を変更したとしても、その第2志望以下の大学等を再び第1志望校として設定できる受験生が1/4程度の割合で存在するという研究結果がある（竹内, 2025）。また、それらの者は、出願決定理由において、大学入学後の学びの内容や環境について、第2志望以下の者よりも重視しているという結果が示されていることから、地方を中心とした国立大学群の中での志望校の変更については、学びたいことが学べるのであれば、志望順位へのこだわりがそれほど強くない、もしくは、前向きに気持ちの切り替えができる受験生が一定数いることが考えられる。

一方、志望順位と入学後の成績の関係について、遠藤・山田（2023）は、大学志望度の一致だけではなく、専門的な学びを期待し学部が一致した学生の方が、学習意欲や入学後の適応度が高い可能性を指摘した上で、私立大学の卒業生調査より、大学は第1志望でなくても学部が第1志望であれば、在学時の成績が高いという調査結果を示している。ただし、この調査は、私立大学における卒業生の振り返り調査であることや、回答者（協力者）の多くが大学在学時や卒業後の満足度が高い、または、在学時の成績が高かったといったサンプルの特性が考えられる。

では、国立大学一般選抜前期日程における出願直前期の受験校決定（変更）者の場合、志望順位と入学後の成績との関係は私立大学での先行研究と同様の結果となるのだろうか。また、学部系統別や性別によって異なる傾向が見られるのだろうか。これが本研究における問いである。

本研究では、共通テスト後に志望校を決定（変更）した受験生の中で、第1志望校として設定できた者と第2志望以下の者では入学後の成績差が見られるのか、また、学部系統別（資格取得が就職に直結する学部系統《ライセンス系統》と直結しない学部系統《非ライセンス系統》）や¹⁾、性別によって異なる傾向が見られるのかどうかという問いを設定し、アンケート調査より検討する。なお、志望順位との関連を検討する入学後の成績については、1年次の成績と卒業時の成績に相関がある（1年次に成績が固定され、その成績が2年次以降から卒業時までの成績に影響するケースが多い）という複数の先行研究が示されていることから（林, 2013；武方, 2017；服部ほか, 2018）、1年前期 GPA を利用した。

2 調査概要

2.1 調査時期・対象・方法

調査は 2022～2024 年度の 3 年間に於いて、K 大学の一般選抜前期日程を経て 4 月に入学した学部 1 年生のうち、入学時アンケート（質問紙調査法）に協力し、成績データ（1 年前期 GPA）と一致させることができた 2,140 人を対象とした。年度別の有効回答数と回答率（学部系統別と男女別）、および、一般選抜前期日程の実質倍率（受験者数／合格者数）は表 1 に示している。K 大学は、四国地区に所在し複数の学部を有する国立の総合大学である。一般選抜前期日程は全学部で実施しており、2022～2024 年度の 3 年間に於ける一般選抜前期日程を経ての入学者の割合は入学者全体の 56.3% を占めている。また、現役生の割合は 79.9% となっている。

表 1 有効回答数・回答率と実質倍率 3 年間の推移

年度	入学者数	有効回答数						回答率	実質倍率
		計	男	女	選択しない	ライセンスシステム	非ライセンスシステム		
2022	722	707	406	301	0	231	476	97.9%	2.4
2023	715	715	389	325	1	234	481	100%	1.7
2024	723	718	414	300	4	235	483	99.3%	1.7

計	2160	2140	1209	926	5	700	1440	99.1%	2.0
----------	-------------	-------------	-------------	------------	----------	------------	-------------	--------------	------------

2.2 質問項目

K 大学の大学、および、学部等の志望順位に関する質問は、「第 1 志望」「第 2 志望」「第 3 志望」「第 4 志望以下」から 1 つを選択、受験校決定時期の質問は、「高校入学前」、「高校 1 年」、「高校 2 年」、「高校 3 年 4 月～6 月」、「高校 3 年 7 月～9 月」、「高校 3 年 10 月～1 月（共通テスト前）」、「高校 3 年 1 月（共通テスト後）～3 月」、「高校卒業後の受験年度 1 月上旬まで（共通テスト前）」、「高校卒業後の受験年度 1 月中旬以降（共通テスト後）」から 1 つを選択してもらった。

なお、質問票には調査の趣旨として、「この調査は、K 大学をもっと魅力ある大学にし、大学が提供する教育の成果・効果を高めるための基礎資料とするために、入学生の方をを対象に調査させていただきます。この調査の一部項目は追跡調査を予定しておりますので、受験番号を忘れずに記入してください。調査の分析は全て個人が特定できないよう処理しますので、あなたに個人的なご迷惑をおかけすることは一切ありません。また、記入いただいた情報の管理に万全を期し、情報漏洩がないように対処します。ご協力をお願いいたします。」という文章を記載し、倫理的な配慮を行っている。また、GPA データの利用にあたっては、K 大学研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：2024-001）。

たします」という文章を記載し、倫理的な配慮を行っている。また、GPA データの利用にあたっては、K 大学研究倫理審査委員会の承認を得ている（承認番号：2024-001）。

2.3 分析手法

1 点目の問いとして設定した「共通テスト後に出願校を決定（変更）した受験生の中で、第 1 志望校として設定できた者と第 2 志望以下の者では入学後の成績差が見られるのか」を検討するため、共通テスト後に決定した受験生の出願校を志望順位別（第 1 志望大学と第 2 志望大学以下、および、第 1 志望学部等と第 2 志望学部等以下）に分類し、それぞれの入学後の成績（1 年前期 GPA）との間に統計的有意差が見られるのかどうかを検証する。

2 点目の問いとして設定した「学部系統別（資格取得が就職に直結する学部系統《ライセンスシステム》と直結しない学部系統《非ライセンスシステム》）、および、性別によって異なる傾向が見られるのか」の検討にあたっては、共通テスト後に決定した受験生の出願校をライセンスシステムと非ライセンスシステムの各学部系統、および、男女別にそれぞれ分類し、志望順位別（第 1 志望と第 2 志望以下）、学部系統別（ライセンスシステムと非ライセンスシステム）、および、性別（男女）における各組み合わせ（8 つの群）について、どの群間で入学後の成績（1 年前期 GPA）との間に統計的有意差が見られるのかどうかを検証する。

なお、本研究において、2022～2024 年度の 3 年間の 1 年前期 GPA データを合算して利用するにあたっては、年度間で有意差が見られないことを確認した（表 2）。

表 2 1 年前期 GPA

2022 年度・2023 年度・2024 年度 一元配置分散分析

変動	平方和	自由度	平均平方	F 値	p 値
グループ間	2.376	2	1.188	2.947	0.053
グループ内	865.327	2147	0.403		
合計	867.703	2149			

3 結果

3.1 共通テスト後の受験校決定者の志望順位（大学・学部等）と入学後の成績との関係

はじめに、K 大学一般選抜前期日程を経た入学者のうち、共通テスト後に出願校を決定した者の割合（2022～2024 年度の各年度と 3 年間の累計）を見たところ、全体（3 年間の累計）では 48.9% と半数近く

を占めた(表3)。また、男女別では、男子が48.2%、女子が49.9%となり性別による大きな差が見られなかった一方で、学部系統別では、資格取得が就職に直結しない学部系統《非ライセンス系統》が56.3%と半数を超え、資格取得が就職に直結する学部系統《ライセンス系統》の33.9%よりも20ポイント以上高い結果となった。

表3 共通テスト後・出願校決定者(人数と割合)

年度		2022	2023	2024	計	
有効 回答数	全体	707	715	718	2140	
	男	406	389	414	1209	
	女	301	325	300	926	
	選択しない	0	1	4	5	
	ライセンス系統	231	234	235	700	
	非ライセンス系統	476	481	483	1440	
共通後 出願校 決定者	全体	人数	360	325	362	1047
		割合	50.9%	45.5%	50.4%	48.9%
	男	人数	199	179	205	583
		割合	49.0%	46.0%	49.5%	48.2%
	女	人数	161	146	155	462
		割合	53.5%	44.9%	51.7%	49.9%
	ライセンス 系統	人数	82	75	80	237
		割合	35.5%	32.1%	34.0%	33.9%
	非ライセンス 系統	人数	278	250	282	810
		割合	58.4%	52.0%	58.4%	56.3%

一方、共通テスト後の出願校決定者のうち、第1志望者の割合(3年間の累計)を見たところ、大学の第1志望者は26.5%、学部等の第1志望者は77.7%となった(図1)。共通テストの結果によって、大学は第1志望を諦め第2志望以下に変更した場合でも、学部等は第1志望を堅持する者が多いことが確認できる。

次に、1点目の問いである「共通テスト後に出願校を決定(変更)した受験生の中で、第1志望校として設定できた者と第2志望以下の者では入学後の成績差が見られるのか」について、大学、および、学部等の志望順位と入学後の成績との関係を示したのが表4-1、表4-2である。大学については志望順位と入学後の成績との間に統計的有意差が見られなかった一方で、学部等については第1志望者が第2志望以下の者よりも入学後の成績が高い傾向が見られた(表4-2, $p < 0.05$)。K大学の場合、出願直前期の受験校決定者の大学の志望順位による入学後の成績に有意差は見られないが、学部等を出願直前期に決定(変更)し

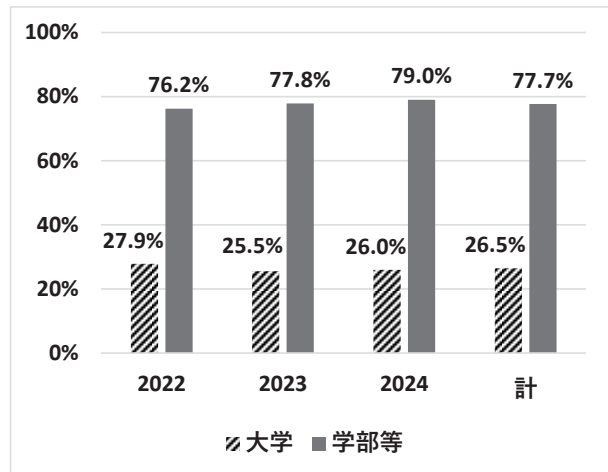


図1 共通テスト後・出願校決定者
大学・学部等の第1志望率(%)

た場合、入学後の成績に差がみられる結果となった。この結果は、遠藤・山田(2023)の先行研究(私立大学卒業生に対する振り返り調査)と一致している。

表4-1 共通テスト後・出願校決定者
大学の志望順位と入学後の成績 t検定

	共通テスト後決定		差 第1-第2以下	p値
	第1志望	第2志望以下		
GPA	2.493	2.559	-0.066	0.151
n数	278	763		

表4-2 共通テスト後・出願校決定者
学部等の志望順位と入学後の成績 t検定

	共通テスト後決定		差 第1-第2以下	p値
	第1志望	第2志望以下		
GPA	2.563	2.467	0.096	0.037*
n数	817	224		

*: $p < 0.05$

3.2 学部系統別、および、性別における学部等の志望順位と入学後の成績との関係

共通テスト後の出願校決定(変更)者全体では、学部等の志望順位が入学後の成績に依存する結果となった。では、全体では成績差が見られた学部等の志望順位と入学後の成績について、学部系統別(資格取得が就職に直結する学部系統《ライセンス系統》と直結しない学部系統《非ライセンス系統》)、および、性別に分類してそれぞれ見た場合、どのような特徴が見られるのだろうか。はじめに、学部等の志望順位別(第1志望と第2志望以下)、所属する学部系統別(ライセンス系統と非ライセンス系統)、性別(男女)におけ

る各組み合わせ（8つの群）の1年前期 GPA を算出し（図 2）、群間で入学後の成績との間に統計的有意差が見られるのかどうかを検証した結果、1%水準で有意差が見られた（表 5-1）。そのため、どの群間で差が見られるのかを確認するため Bonferroni 法で多重比較検定を行い、検定結果を整理したところ（表 5-2）、「男子・非ライセンス系統」が女子よりも成績が低い傾向が見られた。

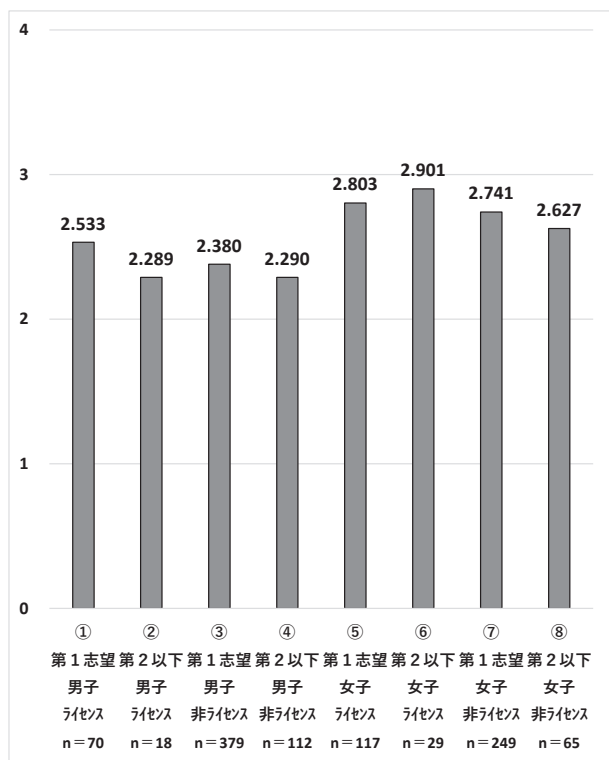


図 2 共通テスト後・出願校決定者「学部等の志望順位×所属学部系統×性別」の入学後の成績（1年前期 GPA）

表 5-1 共通テスト後・出願校決定者「学部等の志望順位×所属学部系統×性別」の入学後の成績一元配置分散分析

変動	平方和	自由度	平均平方	F 値	p 値
グループ間	40.294	7	5.756	15.978	0.000**
グループ内	371.425	1031	0.360		
合計	411.719	1038			

** : $p < 0.01$

次に、学部等の志望順位別（第1志望と第2志望以下）、所属する学部系統別（ライセンス系統と非ライセンス系統）、性別（男女）の3要因の交互作用（複数の要因が組み合わさることで現れる相乗効果）の有無を調べるため多元配置分散分析を行った結果、主効果では、「性別 ($p < 0.01$)」と「学部系統別 ($p < 0.05$)」

表 5-2 共通テスト後・出願校決定者「学部等の志望順位×所属学部系統×性別」と入学後の成績多重比較検定（Bonferroni）による検定結果の整理

	⑥	⑤	⑦	⑧	①	③	④	②
⑥								
⑤								
⑦								
⑧								
①								
③	**	**	**					
④	**	**	**	**				
②	*	*						

* : $p < 0.05$ ** : $p < 0.01$

水準の番号は図 2 と対応している。

で統計的有意差が見られた一方で、交互作用では、「志望順位別と性別 ($p = 0.163$)」、「志望順位別と学部系統別 ($p = 0.800$)」、「性別と学部系統別 ($p = 0.417$)」、「志望順位別と性別と学部系統別 ($p = 0.109$)」のいずれの要因の組み合わせについても統計的有意差は見られなかった。

4 考察と今後の展望

問いの設定に対する調査結果を踏まえ、次の2点を指摘したい。

1点目は、本稿における1番目の問いとして設定した「共通テスト後に出願校を決定（変更）した受験生の中で、第1志望校として設定できた者と第2志望以下の者では入学後の成績差が見られるのか」についてである。

結果は、K大学一般選抜前期日程を経た入学者については、大学の志望順位による入学後の成績の差は見られないが、学部等を出願直前期に決定（変更）した場合、入学後の成績に統計的有意差が見られた。この結果は、遠藤・山田（2023）の先行研究（私立大学卒業生に対する振り返り調査）と一致しており、国立大学と私立大学の共通の傾向であることがわかった。加えて、国立大学一般選抜における共通テスト後の事後出願方式に対する受験生の心構えと対応ができていくことが窺えた。つまり、多くの受験生は、合格の可能性を高めるためには、共通テストの結果によって志望校を変更しなければならないケースがあることを入試制度として受け入れた上で、志望大学を変更するこ

とはやむを得ないが、志望学部等の変更はできる限り避けて国立大学一般選抜での合格を目指していることが考えられる。

この傾向からいえることは、受験者が出願校を変更することに納得していることを前提とするならば、共通テスト後に出願校変更を検討しなければならない場合、大学の変更以上に学部等の変更には注意を払う必要があるということである。この考え方は、現在の高等学校の進路学習やキャリア教育の観点から見れば当然のことかもしれない。しかし、国立大学の入学者選抜では、そのまま適用することが難しい問題が主に2点あることが考えられる。

1つは、受験生を取り巻く経済的な問題である。出願する国立大学を変更することは、特に、地方に居住地がある受験生の場合、自宅から通学できなくなることに繋がるケースが多い。自宅から通える第1志望の国立大学で学部等を第2志望以下に変更すれば合格の可能性が高まる場合、難しい判断に迫られるだろう。

もう1つは、医歯薬獣医系統等に見られる難度が相対的に高い学部系統を志望している場合である。共通テストで思うような点数が取れなかった場合、合格の可能性を高めるために変更できる大学群は限られる。さらに、1点目の経済的事情とも関連するが、浪人できない場合、合格するためにはこの時点で志望学部を諦め他の学部等に変更するしか選択肢がなくなってしまう。いずれにしても、高校時代の早い段階から、自分が設定した目標（志望学部等）の達成に向けて学習に取り組むことと並行して、共通テストで合格目標点に届かなかった場合の自分が納得できる進学先（自分の気持ちに折り合いをつけることができる学部等）について考えておくことが必要だろう。

2点目は、本稿における2番目の問いとして設定した「学部系統別（資格取得が就職に直結する学部系統《ライセンス系統》と直結しない学部系統《非ライセンス系統》）、および、性別によって異なる傾向が見られるのか」についてである。

図2、表5-1、表5-2、および、交互作用の有無を調べるための多元配置分散分析の結果からは、女子の方が男子よりも1年前期GPAが高い傾向が見られた。特にライセンス系統で高く、女子は出願直前期に受験校を決定（変更）し第2志望以下の学部等に出願先を変更した場合でも、所属する学部系統に関わらず入学後の成績に影響を及ぼさない傾向が見られることがわかった。

また、男子の1年前期GPAを見ると、女子よりも

低いことの他に、男子間で比較した場合、統計的有意差は見られないものの、ライセンス系統、非ライセンス系統ともに、第2志望以下の者は第1志望者よりも低かった。この結果からは、1点目の指摘とも重なるが、男子は特に、共通テストで合格目標点に届かなかった場合の自分が納得できる出願先（大学・学部等）について早い段階から考えておくことが必要だといえるだろう。

一方、女子は、共通テストの結果に対して、現実を直視しながら受験時の志望順位に関係なく、入学を決定した段階で次の目標（入学後の学習）に向けて取り組める者が多い可能性が示唆される。

以上、本研究では、K大学入学者に対する調査より、国立大学の出願直前期に（一般選抜前期日程）に受験校を決定（変更）した者について、全体では、1年前期の成績が学部等の志望順位に依存する（第1志望の者が第2志望以下の者よりも成績が良好である）ことを明らかにした。また、学生が所属する学部系統（ライセンス系統と非ライセンス系統）や性別の特徴から見た場合、女子が男子よりもライセンス系統に所属する学生を中心に1年前期GPAが高いことや、男子については学部等の志望順位において、第2志望以下の者が第1志望者よりもGPAが低いことを示した。

最後に、本研究の今後の展望について述べたい。本研究では、共通テスト後に出願校を決定（変更）した者について、志望順位、性別、学部系統別と入学後の成績（1年前期GPA）との間に関連が見られるのかどうかを検討したが、男女間で有意差が見られる項目が目立った。その結果を受けて、今後は、志望校変更に対する納得感や気持ちの切り替え、また、入学した大学に対する環境適応度などについて、別途、質問紙調査やインタビュー調査などで明らかにする必要があると考える。

また、本研究は四国地区に所在するK大学入学者に対する調査結果の分析に留まるため、分析結果の精度をより高め一般化するためには、病院の有無や大学の規模等による国立大学法人の類型別（文部科学省、2017）、また、地域別等の調査によって継続的に観測していくことが必要となるだろう。今後の検討課題としたい。

注

- 1) 医療系統や学校教員養成系統など、資格の取得が就職に直結する学部系統をライセンス系統、その他の学部系統を非ライセンス系統に分類して分析を試みた。

参考文献

- 遠藤健・山田寛邦 (2023). 「大学・学部志望度と入学・卒業後のアウトプット間の検証 - 学部卒業 10 年後調査を事例に - 」『大学入試研究ジャーナル』 **33**, 205-211.
- 服部辰広・久保山和彦・樋口毅史・松田康宏・箭柏えり・伊藤譲 (2018). 「1 年および 2 年次の成績と 4 年次成績との関係性について - 整復医療学科 2014 年度入学生 (1 期生) を対象とした調査より - 」『日本体育大学紀要』 **48** (1), 61-64.
- 林寛子 (2013). 「大学入学時と卒業時における学生の『質』と選抜方法の評価」『大学入試研究ジャーナル』 **23**, 79-84.
- 高地秀明 (2014). 「入学者の出身県別に見た大学志願行動 - 平成 26 年度入学者に対する調査から (教育学部, 工学部について) - 」『広島大学入学センター年報第 12 号』平成 26 年 8 月 31 日, 10.
- 文部科学省 (2017). 『国立大学法人分科会 業務及び財務等審議専門部会 (第 4 回) 配付資料 3-2 国立大学法人の類型化について (案)』平成 17 年 6 月 22 日 < https://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/kokuritu/004/gijiroku/attach/1385482.htm > (2025 年 4 月 18 日)
- 武方壮一 (2017). 「入試成績と GPA の相関についての解析」『宮崎大学教育・学生支援センター紀要 第 1 号』2017 年 3 月, 1-16.
- 竹内正興 (2025). 「共通テスト後に変更した出願校を第 1 志望にできる受験生の特徴 - K 大学一般選抜前期日程入学者における 10 年間の動向より - 」『大学入試研究ジャーナル』 **35**, 123-128.
- 寺下榮・村松毅・田中勝 (2008). 「一般入試志願者の受験行動に関する調査 - 募集要項の請求から入学手続まで - 」『大学入試研究ジャーナル』 **18**, 13-18.
- 吉村宰・木村拓也 (2010). 「新入生を対象とした入試広報活動に関する調査」『大学入試研究ジャーナル』 **20**, 209-215.